
願い

エダマメ屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願い

【Zコード】

N71911

【作者名】

エダマメ屋

【あらすじ】

高校2年の戸川翼とがわつばさきは、廃校された高校でオバケの少女に会つ。オバケの少女の願いとは・・・

プロローグ

誰からも必要とされない世界。

そこには、もう僕の居場所なんてないのかもしない。

それでも、僕がこの世界にいる理由。

それは、誰かに必要とされたいから。

ありがとうって言つてほしいから。

どうしようもなく小さな夢。

それでも僕はその夢のために生きる。

僕の名前を呼ばないで

地面に投げ出され、ナイフで切り刻んだよつなボロボロの看板。それには、泉が丘第2高校いずみがおかだいにじゅうこうと記されている。

人つ子一人見当たらないこの高校は10年くらい前に廃校はいこうされた。

老朽化が原因だという。

そんな高校に毎日のように通う僕、戸川翼とがわつばねは本当は、新泉が丘第

4高校の2年生。

出席日数はギリギリ。

いわゆる不登校ふとうこうつてやつである。

1年のときは、新しい高校に胸おどらせていた。

テストだってそこそこの成績だつたし、恋だつてしたさ。

でも、桜が散りはじめて夏の息吹を感じ始めたころそれは突然やつてきた。

あれは数学の時間だつた。

教師の長つたるい話を無視して、窓の外を見つめながら
ああ、夏だな——なんて考えていた。

すると、ノックもせずに普段顔をあわせることのない事務の先生が勢いよく扉を開けた。

いつせいに、扉の方に生徒の視線が集まつた。

僕もその一人だつた。名前を呼ばれるまでは・・・

「戸川くん、ちょっとといいかな。」

事務の先生は豊満な胸を上下させながら僕の名前を呼んだ。すぐにみんなの視線は僕に集まつた。

とても、嫌な予感がした。

ガタツ——といすを鳴らしながら席を立つ。

そのまま、僕は扉の向こうに消えた。

僕は泣いてることにも気づかない

事務の先生は、僕がついてくるのを確認すると西オープنسペースまで無言で歩いていった。

僕もそのあとにつづく。

その間も僕の心臓は高鳴つていく。

——なんなんだよ！言いたいことがあるなら早く言えよ！
緊張と不安のせいで僕は非常にイラついていた。

後一步で怒鳴りそうになつた僕の声をやえぎるよう先生は言つた。

「落ち着いて聞いてね。あなたのお父さんが交通事故にあわれて、とても危ない状況らしいの。」

「——え？」

おやじが？なにこれドッキリ企画でもあるまいし・・・

そう思つたのもつかの間、先生は涙を流す。

僕のことを思つて？

僕が泣かないでどうしてあんたが泣いてんだよ！

僕は自分が泣いていることにも気づかない。

「つ！」

役に立たない先生を置いて、チャリ置き場まで全力疾走する。自分が今なにを考えているのかさえ分からない。

ただただ、機械的に自転車のペダルをこいでハンドルを病院まで滑らせる。

僕の目に映つたものは

普通なら1~5分かけていく道を今日ばかりは5分で疾走する。
まあ、信号を無視して車道を突つ切つてきたから当たり前なのかも
しれない。

病院の正面玄関に付くと同時に自転車を乗り捨てる。

自動ドアが開く間も惜しむくらいにあせつてゐる僕を見て周りは
一瞬ビックつとしたが、そんなことは気にしない。

受付に手術室を聞いて、僕は階段をまたも疾走する。

僕が着いたときには手術室の扉は開いていた。

一瞬、手術室を間違えたかと思ったが、中から母の声がしたので
ここで合つてゐるのだと確信する。

手術は、成功したのだろうか？

それとも――

最悪のパターンが頭をよぎり、一瞬めまいがした。
おそるおそる手術室に足をふみいれる。

ああ――

僕の目に映つたのは――

頭に白い布をかぶつた父の姿だった。
そこで僕の意識は途絶える。

僕の周りの歪んだ世界

僕が次に目覚めたのは、家のベットであった。

ちょっと周りに田をやると母の姿が夕焼けをバックに『』しだされ
ていた。

しかし、よく見ると母の影の隣にはもうひとつ影がある。
父なのだらうか？

でも、記憶をたどれば白頭巾をかぶつた父の姿が頭をよぎる。

いやもしかしたら僕は夢を見ていたのかもしれない。

父は生きていたのだ。

きつとやうに決まつてゐる。

父が死んだなんて歴史はあつとなかったのだ。

やう思つて二つの影に手を伸ばしてみる。

次の瞬間、オレンジの太陽が雲と重なる。

それと同時に二つの影の層も重なつた。

逆光で見えなかつた二つの影は光を失い僕の目にはつきつと『』
だされた。

ひとつは母の姿をしたモノ。そしてもうひとつは見知らぬ男の姿
をしたモノ。

ああ、どうして世界はこんなにも歪んでこるのだらう。

僕はただみていろだけ

「母さん・・・、父さんは死にこなのを・・・？」

僕はかすれた声で問う。

自分でもうすうす気づいているくせにそれを否定してほしくて、わらにもすがる思いで問う。

「あら、起きてたの？父さん・・・だった人ならさつき死んだわ。驚いた。父さんが死んだことではない。そんなことは気づいていたから。

驚いたのは、父が死んだことを平氣な顔で、遠い昔を語るような口調で語る母の姿。

「でもね、心配しないで。これからはこの人が新しい父さんよ。」

母さんは隣の男の背に手をまわしながら言ってのけた。

「でも、あんなに父さんと仲良かつたじやないか！いまさらどうして・・・。」

僕はこの現実を認めたくなくて必死にもがく。

でも、母さんはそんな期待を裏切るようにけりつとして

「そう？仲良く見えた？」
僕に答えを求めてきた。

吐き気がした。

人間はこんなにも簡単に他人を裏切ることができるのか。

僕はガンガンする頭を抱えながら、当てもなく部屋を飛び出した。

僕は必死に走る

この腐った世界から逃げたくて、どこでもいいから隠れたかった。
ああ、どうして世界はこんなにも歪んでいるのだろうか？
裸足で走る僕の体力の限界が来たとき、“それ”はそびえたつてい
た。

普段ならそこは空き地になつてゐるであろう場所に。

“泉が丘第2高校”

まさかその高校でどんなに僕の気が狂つたか・・・。

今の僕には知る術はない。

ああ、ついに僕の頭は狂つたか。

そう思った。

だつてこの高校はもうずっと使われていなくて、一年くらい前に取
り壊しがあった。

そんなあるはずのない高校が僕の目の前にあるのだから。

こんな状況になればだれでも狂うだろう。

家にでも帰つてままにすがりつくだろうか？

でも今の僕は驚きもしなかつた。

ただ、冷静に僕の頭が狂つたことを判断した。
そのことを重々承知のうえで校門をくぐつた。
そして階段をのぼつてみる。

それはかなりリアリティがあつた。

ふいに視界が開けたかと思うとそこには1年1組の文字。
なんとなく入つてみた。

ほこりをかぶつた机といす。

そして僕の目にとまつたものは、もう月明かりしか入つてこない割
れたガラス窓。

まるで、磁石に引っ張られているようにならの窓ガラスに貼みよって
いく。

僕は目の前の状況を理解できない

窓から見下ろす景色はひどく僕に開放感をあたえた。
この歪んだ世界のどこにもいない感じ。

僕だけの世界。

この窓から飛び出したらきっとそれは今よりも完全なものとなることを悟つた。

僕は迷いもせずに窓を飛び出した。

“ダメ”

その声を聞いたとたん僕の体は後ろに引っ張られるよつとしてしつ
もちをつけ。

「いたつ」

状況の把握ができない僕に対して“それ”は追い討ちをかけた。

“それ”は一人の少女だった。

歳は僕と大して変わらない気がする。

少女は“どうして？”を連呼するばかり。

僕は恐る恐る少女に手を伸ばす。

後ちょっとで触れんばかりのところで少女はおののいた。

“どうして君はここにいるの”

やつとのことで声にしたのだろう。

はためからみても声が上ずつていて分かった。

そうはいつてもこの声は耳から届いていないことがわかつた。

直接頭に響いてくるのだ。

「どうしてって……」

“だつてこの高校は1年前に廃校になつていてここにあつてはなら
ないモノなのに”

「そしたら君だつて同じじゃないか。」

“どうやら僕はこの少女を人としてみていいらしい。”

“同じじゃないわ”

急に声が小さくなつたのがわかつた。

“だつて私は死んでいるのだから”

僕は目を見開いた。

ああ、これがこの整つた顔立ちの少女がオバケとでもいうのだろうか？

僕はまた少女に向かつて手を伸ばしてみた。

そして少女に触れた。否觸れなかつた。

僕の手は空しく虚空を切つただけだつた。

“ほら・・・。”

少女は悲しい顔をしながらいつた。

口の閉じない僕に向かつて少女は語り始めた。

それは信じがたいことだつたけど、この状況と少女の話のつじつまが合いすぎていて、信じるほかなかつた。

* * *

“私と反対の物質である君。でも精神は物質を超える。分かる？わからぬよ。”

コクリとうなずく僕を尻目に彼女は平坦にいつた。

その説明は分かりたくないくらいに分かりやすかつた。

“つまりこういうこと”

彼女はゆつたりとした動作で窓の外を指差した。

窓枠にある光景はひどく僕の頭をかき回した。

窓の外には僕の姿があつた。

うつろな目をして突つ立つている僕。

“分かつたよね。だから物質とは、外にいる君の肉体。精神はここにいる君の心、魂。”

理論は分かつた。それを分かると答えるには僕は認めなくてはいけないので。この現状を。

“まだ、信じていないよね。分かるよ。魂はとっても素直だから”
僕の心を見透かされた。

見透かされたというより、見られたという表現が正しいのだろう。

“きつと君の魂は健全な肉体とはまったく逆の方向に向かっている。死という黄泉の方向。だから君の魂は生と死、人間界と天界、地上と天空、穢れと清めの間の世界《聖域》に迷ってしまった。つまりはここのこと”

またも僕の魂は理論を理解してしまった。

“皮肉なものね。あんな健全な肉体をもつてゐる君おも、無条件に闇へと引きずりこむ人間は・・・”

この少女は何もかも知っていた。

それでも少女は何も知らないというのだ。

“私はどうしてこんな穢れた世界にとどまつたのかな？きつと天界へいけば何も悩むことをせずにすんだのに。でもきつと生前の私はこんな思いをしてまで成し遂げたかった願い、夢があつたのでしう。でも、私は知らない。夢を知るためにには生前の私を知る人間をつかまえなくては・・・”

なかば独り言になつてしまつた話を、それでも僕は懸命に聞いていた。

“あ・・・『めんなさい。』

独り言になつてしまつた自分によつやく気づいたのか、やつと話をとめた。

“でも、きつと君は私のことを知らないだらうから・・・。はやく帰つて両親と仲直りすることが一番だわ。もう死にたいなんて考えないで。”

僕は自分でも驚くほど素直になつていた。

これは魂だからだろうか？それとも僕の心の問題なのかは分からなかつた。

むしろ、どちらでも関係なかつた。

「僕には帰る場所なんてない。」

少女は反抗していつた。

“いいえ、いくらでもある。もう私にはないけれど、あなたは作ろうと思えばいくらでも自分の居場所を作ることができる。”

「そんなこといつたら君だつて居場所を作ろうと思えば作れるじゃないか。」

“だつて私は死んでいて、誰も、どこにも受け入れられない。”

僕はゆっくり息をすつて言った。

「今まで君の言つていたことは正確に的を射ていた。でも今一回だけ的をはずした。」

少女はわからないといった様子で僕の言葉を待つた。

「あいにく様僕は今フリーなんだ。それでいて僕の居場所となる場所も見つかっていない。だから・・・」

しばしの沈黙の後に

「僕が君の居場所になる、だから君が僕の居場所になつてほしい。」

僕はすっかりこのオバケという少女に情が移つてしまつたらしい。僕の提案を聞いた少女はびっくりしたように僕を見ていた。

せめてもの反撃だ、と僕は思った。

でも、少女はすぐにさつきまでのポーカーフェイスにもどると、

「別に・・・あなたがいいなら居場所になつてあげるけど・・・。」

なんていう人間らしく愛らしい言葉を口にした。

僕の名前と君の名前

“はやく体にもどったほうがいい”
少女は思い出したように言つた。

それもそうだ。そう思つた瞬間に僕は体に戻つていた。
一瞬頭がくらくらしたが何とか踏ん張ることができた。

頭が覚醒し始めると、今までのことがすべて夢のように感じた。
もしかしたら夢だったのかも知れない・・・。

と、思った矢先僕の右肩に蝶がとまつた。
すぐにそれが何であるか僕は悟つた。

“今までのことが夢だったんじゃないかなって思つてる?”
「そうであつてほしかつたよ。」

“誓つたのはあなただから”

直接響いてくる声はどこか陽気さを感じられた。
「どこへ行こうか?」

とは、いつたものあたりは闇に覆われていた。

“どこでも”

僕は行くあてもなく歩きはじめた。

“名前教えて”

僕は自己紹介をしていないのを思い出した。

「僕は蛍日裕太。」

“変わった名前”

「君は?」

聞き終わつてから、口をつぐんだ。この少女は自分の名前を知らないのだ。

“名前考えて”

「僕?」

いつの間にか少女は人の姿になつていた。

少女は「クリ」となづく。

「うーん？」

悩んだ挙句僕は第一印象で決めた。

「小夜っていうのは？」

“どうしてそうなったの”

「君が夜みたいだからだよ」

“アバウトだわ”

僕は少女にののしられちょっとブスッとなつた。
でもその次に少女は

“でも、いい名前・・・”

そう言うと少女は蝶の姿に戻ってしまった。

もう少し少女を見ていたいと思った僕はちょっと残念だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7191i/>

願い

2010年10月15日19時22分発行